

ひとりぼっちの夏の日曜日

それは普通、あなたが7歳か8歳の頃に起こる。それも、ある夏の日曜日の午後。雨の降る午後かも知れないし、強い日差しを浴びた午後かも知れない。太陽が歩道の石や近所の屋根を焼きつける午後。もしくは、しとしと降る、鬱屈な雨の降る午後かも知れない。

あなたは家にいる。海岸にいるかも知れないけれども、そこにはいない。海には行けなかったか、あるいは、家族がまだ海岸に行く時期ではない、はたまた、その年は別荘には行けない（家賃は途方もなく高く、生活費は非常に高価である、など）といった理由からあなたは家にいる。あなたは、ひょっとすると、プールにいるかも知れないが、その他のいずれかのことが原因で、そこにもいない。そして、公園にも、映画館にも、どの場所にもいない。あなたは何年も前からすでに知っている、この古びた家にいるのである。

あなたは友人を探し求めることにする。一人に電話をし、また別の友人に、さらに別の友人というように。そして失望が募り募って行く。つまり、一人の友人は海岸にいて、もう一人の友人は別荘に出掛けて行き、別の人は会員制クラブにいる。別の友人の家では、電話はただ鳴り続けるだけで、出る人もいない。

あなたはまさに独りなのである。あなたのお父さんは寝ていて、お母さんは本を読んでいる。そして、もしあなたにお兄さんが一人いるなら、そのお兄さんは出かけたのだ。あなたは何をすればいいのか分からない。あなたはすでに10回テレビをつけたり、切ったりした。あなたはすでに公開番組の司会者の熱狂した叫び声を聞き、すでに西部劇で10人の強盗が死ぬのを見た。あなたはすでにうんざりして、スマトラ島の遠く離れた景色を見た。そして、お母さんが絵を描くように勧める。しかし、あなたはすでに絵を描き、すでに遊んでしまった。あなたは話し相手を必要としているのだ。ひとつの文章が他のそれと関係のなかった、意味のない、幼少時代のあのおしゃべりが。

あなたは家のドアを開け、外に出る。通りには誰一人いない。あなたがこれまで見たことがないほど人けがない。自分の家の前に座っている一人の老人、道の真ん中でのらくら歩いている犬がいる。—それのみだ。

あなたは玄関の敷居に座り、アリをじっと眺める。アリにとっては日曜日も存在しないし、日曜日の午後も、退屈なこともない。アリは自分たちの隠れた巣に向かって、行ったり来り、すばやく動き回っている。数分間、あなたは興味深くアリを観察する。その後、飽きて、ため息をつく。

夏の午後に、あなたはため息をつく。それは生まれて初めてのため息かも知れないし、そうでないかも知れない。いずれにしても、それは若者の胸の奥底から湧き上がるものである。あなたは孤独を思い出したばかりなのだ。しかし、奇妙なことに、あなたは悲しがない。友人に対する不当な怒りや泣きたい気持ちまでも過ぎ去った。あなたは家に戻り、夏に孤独でいる人たちにとっての最後の逃げ場を探し求めて行く。つまり、それは冷蔵庫だ。そこには、少なからずアイスクリームがある。

2005年12月2日
田所清克・岐部雅之共訳